

論 文

女子青年における父親の魅力

— 父親との接触経験の影響 —

諸 井 克 英

現代社会学部・社会システム学科

Abstract

The present study examined (a) the factor structure of the attractiveness of the father and (b) the relationship between the attractiveness of the father and relationship experiences with the father in female adolescents. The Attractiveness of Father Scale (Onodera, 1984) and the Relationship Experiences with Father Scale (Onodera, 1984; 1993) were administered to female adolescents ($N=231$). The latter scale measured the father-daughter contacts in both the past time (the junior high school age) and the present time. The factor analysis (principal factor method with promax rotations) of the Attractiveness of Father Scale yielded three factors, labeled as follows; humanistic attractiveness, attractiveness as a male, affiliation between father and mother. The analyses of the Relationship Experiences with Father Scale were executed. The relationship experiences with the father were composed of emotional bond and control in either the past time or the present time. To examine the relationships pattern among father-attractiveness factors and relationship experiences factors, structural equation model analyses (*Amos5.0*) were executed. A good solution was found. Father's emotional bond strongly influenced the humanistic attractiveness of father. Interestingly, either emotional bond or control in the past time was significantly related to father-attractiveness. The father existence problem proposed by Mitscherlich (1963) and Freud's trauma viewpoint (1917) were also discussed.

Key words: father, attractiveness, emotional bond, control, adolescent.

I. 問 題

わが国では、80年代になると「家族の危機」や「家族の崩壊」が唱えられ（篠崎、1996参照）、伝統的な家族の変容に関する研究が盛んになった。心理学領域でも、親が子どもにどのような関わりをもつかという養育態度の観点や、

Bowlby (1969) によって提起された愛着理論の枠組みなどに基づく、多くの親子関係研究が生み出された（諸井、2002参照）。

しかし、柏木が指摘するように（柏木編、1993）、Bowlbyによる愛着理論の枠組みが研究構図に大きく影響した。つまり、伝統的な家族の変容が進行しているにもかかわらず、親子関係研究は、母親と子どもの軸を中心に展開されたのである。これは、Parsons & Bales (1956) が説いた核家族がもつ性役割化機能の図式にも呪縛されているといえよう。

Freud (1917) に始まる精神分析に基づき、

小野寺（1984）は、短大・大学に通う女子学生を対象として、父親の魅力の規定因を検討した。父親に対する魅力は、父親の社会的属性よりも、両親の関係の理想度や、父親との日常的接触などによって影響されていた。本研究では、父親の魅力に対する日常的接触の効果に焦点を絞り、魅力と接触の関連を検討する。

諸井（2004）は、小野寺（1993）が開発した尺度に基づき、父親と母親それぞれとの現在の関係経験を測定した。因子分析の結果、小野寺（1993）の結果がほぼ再現され、「情動的絆」と「統制」の2因子が抽出された。過去（「小学5・6年生だった頃」）の関係経験に関する尺度で得られた因子とともに主成分分析を行ったところ、関係経験の対象（父親、母親）を示す2次元に加え、父親と母親両方による「統制」を表す次元を得た。

また、諸井（2005）では、今井（1986）が作成した「社会的勢力測定基盤」尺度を利用して、父親と母親それぞれに対する現在の社会的勢力認知を測定した。父親と母親それぞれに関する影響認知の因子得点を対象に主成分分析を試みると、影響源（父親、母親）によって区別される『敬意』に加え、影響源が一体となった賞罰的態度を表す『畏怖』が現れた。これは、諸井（2004）が得た知見と対応している。

2つの研究は、父親と母親からの影響のうち「統制」機能が子どもによって一体のものとして認知されることを表している。早60年代に、精神分析学者のMitscherlich（1963）は、現代社会に特徴的である非具象的な労働形態の増加が逆説的に伝統的な父親像を衰退させることを指摘した。先述したParsons & Bales（1956）による道具性リーダーとしての父親と表出性リーダーとしての母親という核家族がもつ社会的機能からすると、Mitscherlichの指摘は、諸井（2004；2005）が見いだした「統制」の一体性に対応するかもしれない。つまり、父親特有の「統制」的影響が消失し、母親による「統制」と相関しながら子どもに影響するのである。したがって、おそらく父親による「統

制」は、本来は魅力の源泉であるにもかかわらず、父親に対する魅力にはあまり影響しないかもしれない。

一方、父親による「情動的絆」は、母親のそれとは比較的独立的に発揮される（諸井，2004）。父親と母親の役割に関する男女平等の視点が子どもに醸成されていることを前提にすると（諸井，1997参照）、母親特有の魅力源泉であったはずの「情動的絆」も父親の魅力が高めると考えられる。

以上に述べたことを踏まえて、本研究では、女子青年（大学生）を対象として、父親の魅力に対する日常的接触の影響を検討する。父親との日常的接触の指標として、現在と過去（「中学3年生の頃」）における接触を測定するが、親子関係の認知に関する先行研究（諸井，2004；2005）での成果に基づくと、以下の仮説が導かれる。

仮説1：子ども（娘）に対する父親の行動は、過去、現在のいずれでも「情動的絆」と「統制」の2側面から構成される。

子ども（娘）が父親から受ける2側面がどのように魅力の源泉となるかについては、Mitscherlich（1963）を中心とする先述の論議から、次のように仮説化できる。

仮説2：父親の魅力は、父親による「統制」よりも「情動的絆」によって促進される。

ところで、本研究では、現在と過去における父親との日常的接触を扱う。父親の魅力に対して、現在と過去の接触のどちらが相対的に影響を示すかは、興味深い。青年期がそれまでの親との関係から友だちとの関係へと対人関係の中心が移行する時期（久世・平石，1992）であるとするれば、父親の魅力は現在よりも過去の接触経験によって影響を受けるはずである。しかし、影響と結果の時間的近接性からすれば、現時点での接触の様相のほうが魅力を左右することになる。また、接触の2側面それぞれで時間的影響が異なるかもしれない。たとえば、父親による「統制」は、親からの心理的独立を妨げると認知されれば、魅力を損ねるはずである。一方、現時点での「情動的絆」の発揮は、先述したよ

うに魅力を高めるかもしれない。

本研究では、父親の魅力と父親との日常的接触との関係を時間軸を媒介させて検討するが、今述べたように単純に仮説化できない。そこで、現在の接触と過去の接触の弁別的影響に関する仮説は、とくに設けなかった。

II. 方 法

調査対象および調査の実施

同志社女子大学での社会心理学関係の講義を利用して、『日常生活』調査の名目で質問紙調査を実施した（2003年10月7日）。なお、回答の匿名性を確保した。青年期の範囲を逸脱している者（25歳以上）を除き、後述する尺度すべてに完全回答した女子学生231名を分析対象とした。つまり、調査時点で父親と母親が健在の者が対象である（平均年齢：19.84歳＜ $SD = .693$, 19～22歳＞）。

質問紙の構成

質問紙は、被験者の基本的属性に関する質問群に加え、対父親接触経験尺度（過去、現在）、および対父親魅力尺度から構成されている。

1. 対父親接触経験尺度

被験者が日常生活の中で、父親との接触の様子を測定した。そのために、小野寺（1984, 1993）が作成した2つの尺度の項目を利用した。12項目から成る「日常の接触行動」尺度（1984）では、因子分析により「社会生活について語る父」、「親としての行動をとる父」、および「異性としての父親の自己開放性」の3因子が抽出された。また、17項目から構成される「父子（母子）関係」尺度（1993）については、主成分分析に基づき「情緒的結びつき」と「統制」の2側面が認められた。

これらの項目の内容を検討し、類似項目を除き22項目に整理した。その上で意味内容が明確になるように文章表現に修正を加えた。もともとの小野寺の尺度では過去の経験の現在の経験が混在しているので、本研究では、過去における父親との接触経験と現在の父親との接触経

験をそれぞれ測定するように2通りの尺度を作成した（Table 1-a, 1-b 参照）。

過去の接触経験については、「中学3年生の頃」を想起させて回答させた。現在の接触経験では、「この6ヶ月間」という基準を設けた。各時間基準教示の後に、22項目それぞれで表されている事柄にあてはまる程度を4点尺度で回答させた（「4. かなりあてはまる」～「1. ほとんどあてはまらない」）。

なお、過去と現在の場合で項目順を変え、さらにそれぞれで項目順の異なる2通りの質問紙を作成した。また、被験者のほぼ半数には、まず過去の接触経験を回答させ、次に現在の接触経験を尋ねた。残りの被験者では、逆の順に評定させた。

2. 対父親魅力尺度

父親に対して被験者が現在抱いている魅力を測定するために、小野寺（1984）が用いた尺度項目を利用した。この尺度は、因子分析によって「人間的魅力」、「異性としての魅力」、および「両親間の親和」の3つの側面から構成されることが見いだされた。本研究では、15項目の意味がより明確になるように、修正を加えた（Table 2 参照）。

「この6ヶ月間」という基準を設け、15項目それぞれで表されている事柄にあてはまる程度を4点尺度で評定させた（「4. かなりあてはまる」～「1. ほとんどあてはまらない」）。項目の配列順効果を相殺するために、項目順を変えた2タイプの質問紙を使用した。

なお、以上の尺度では、「死別や離別などのために」に父親がいない者は、関連する回答部分を飛ばすように教示した。

III. 結 果

3つの尺度の検討

3つの尺度それぞれの因子構造を検討するために、因子分析（主因子法、プロマックス回転＜ $k = 3$ ＞）を行った。まず、項目平均値の偏り（ $1.5 < m < 3.5$ ）と標準偏差値（ $SD > .60$ ）

のチェックを行い、不適切な項目を除去した。次に、残りの項目を対象に因子分析を行った。

初期因子固有値 ≥ 1.000 を満たす解をすべて求め、プロマックス回転後の負荷量 $|.400|$ を基準に妥当な因子解を同定した。①特定因子の負荷量が十分に大きく($\geq |.400|$)、②他因子への負荷が小さい($< |.400|$)という基準に一致しない項目を除き再度分析を行い、明確な負荷量パターンが得られるまで、このことを繰り返した。最終的には、各因子分析で回帰法によって因子得点を算出した。

1. 対父親接触〈過去〉尺度

項目水準の検討では3項目が不適切であった。残りの19項目を対象として、2~5因子解を求めた。抽出因子が解釈可能で同一因子への負荷が比較的明確であった2因子解を採用した。最終的な因子分析の結果をTable 1-aに示す。

第I因子は、父親による子どもの行動に対する統制・規制を表す項目の負荷が高かった。また、第II因子に高い負荷を示した項目は、子どもとの交流を示す項目であった。それぞれ、「統制_過去」、「情動的絆_過去」と名づけた。これらは、小野寺(1993)や諸井(2004)と一致した。

2. 対父親接触〈現在〉尺度

3項目が項目水準の検討で不適切であったので、残りの19項目について因子分析を行った。2~4因子解が検討された。〈現在〉尺度でも2因子解の負荷量パターンが明確であった。最終的な因子分析の結果をTable 1-bに表す。第I因子は父親による統制、第II因子は父親による情動的絆を表していた。それぞれ、「情動的絆_現在」、「統制_現在」とした。したがって、対父親接触〈過去〉尺度の分析結果と合わせると、仮説1は明確に支持された。

Table 1-a 対父親接触〈過去〉尺度に関する因子分析(主因子法, プロマックス回転 $k=3$)の結果
—プロマックス回転後の因子負荷量—

	I	II
(I. 統制_過去)		
15 父親は、私のしつけに厳しく厳格な教育方針をもっていた。	.818	.044
5 父親は、私に口答えを許さなかった。	.727	-.171
17 父親は、叱ったり批判することが私のためになると思っていた。	.720	-.099
21 父親は、私が悪いことをした時、かっとして怒った。	.623	.016
11 私のことについては、父親が最後には決めていた。	.605	-.033
9 父親は、私の帰宅時刻にうるさかった。	.596	.073
14 父親は、私の身なりについていろいろ注文をつけてきた。	.563	-.014
8 父親は、私がどこで何をしているかをいつも気にかけていた。	.431	.322
20 父親は、私の将来について気にかけていた。	.423	.339
(II. 情動的絆_過去)		
4 父親は、よく私の相手をしてくれた。	-.052	.785
18 父親は、一緒にテレビを見ながら番組について私に話をしてくれた。	-.060	.642
12 父親は、世の中で起きていることについて私に話をしてくれた。	.128	.608
6 父親は、自分の子どもの頃や学生時代の思い出について私に話をしてくれた。	-.018	.603
16 父親と私は、2人で外出することがあった。	-.103	.563
13 父親は、私の頭を撫でたり、私の肩をたたいたりしてくれた。	.018	.534
2 父親は、私の入学式や卒業式などの特別な行事には来てくれた。	-.034	.488
1 父親は、自分の仕事や職場の出来事について私に話をしてくれた。	.025	.480
22 父親は、私の誕生日には必ずプレゼントやカードをくれた。	.026	.471
7 父親は、家族旅行などでいろいろな所に私を連れて行ってくれた。	.028	.418
[因子間相関]	I	.272
[残余項目]		
3 私の異性関係について父親の方から尋ねてきた。xz		
10 父親は、自分の好みの女性のタイプについて私に話をしてくれた。x		
19 父親は、ポルノ雑誌やポルノ小説を私の目の前で読んでいた。xz		

$N=231$; 初期固有値 ≥ 3.068 ; 初期説明率: 43.54%

x: 平均値 < 1.5 ; z: $SD < .600$

Table 1-b 対父親接触〈現在〉尺度に関する因子分析（主因子法、プロマックス回転〈 $k=3$ 〉）の結果—プロマックス回転後の因子負荷量—

	I	II
[I. 情動的絆_現在]		
2 父親は、よく私の相手をしてくれる。	.805	-.011
4 父親は、一緒にテレビを見ながら番組について私に話をする。	.715	-.040
9 父親は、世の中で起こっていることについて私に話をする。	.630	.158
16 父親は、自分の子どもの頃や学生時代の思い出について私に話をする。	.594	.076
18 父親と私は、2人で外出することがある。	.587	-.083
11 父親は、自分の仕事や職場の出来事について私に話をする。	.551	-.089
3 父親は、私の誕生日には必ずプレゼントやカードをくれる。	.548	-.034
8 父親は、私の頭を撫でたり、私の肩をたたいたりしてくれる。	.455	-.022
20 父親は、私の入学式や卒業式などの特別な行事には来てくれる。	.412	-.017
15 父親は、家族旅行などでいろいろな所に私を連れて行ってくれる。	.412	.089
[II. 統制_現在]		
22 父親は、私のしつけに厳しく厳格な教育方針もっている。	-.005	.798
1 父親は、私に口答えを許さない。	-.137	.731
12 父親は、叱ったり批判することが私のためになると思っている。	-.095	.650
5 父親は、私の帰宅時刻にうるさい。	-.047	.645
6 父親は、私がどこで何をしているかをいつも気にかけている。	.180	.589
10 父親は、私が悪いことをした時、かっとして怒る。	.067	.576
19 父親は、私の身なりについていろいろ注文をつける。	-.057	.554
17 私のことについては、父親が最後には決める。	.030	.497
13 父親は、私の将来について気にかけている。	.288	.478
[因子間相関]		
	I	.324
[残余項目]		
7 父親は、ポルノ雑誌やポルノ小説を私の目の前で読む。xz		
14 私の異性関係について父親の方から尋ねてくる。y		
21 父親は、自分の好みの女性のタイプについて私に話をする。x		

N= 231; 初期固有値 \geq 2.928; 初期説明率: 43.73%

x: 平均値 $<$ 1.5; y: 平均値= 1.5; z: SD $<$.600

3. 対父親魅力尺度

項目水準の検討では1項目のみが不適切であり、残り14項目を対象にした。2～3因子解が可能であったが、3因子解が小野寺(1984)と同じ結果をもたらした。この結果をTable 2に示す。第I因子では、父親を一人の人間として評価する項目の負荷量が高く、「人間的魅力」と名づけた。第II因子に高い負荷を見せた項目は、父親を一人の異性として意識する項目であり、「異性としての魅力」とした。第III因子では、父親と母親の良好な関係を表す項目で高い負荷が認められ、「両親間の親和」と命名した。**対父親魅力に対する対父親接触経験の影響**

父親との接触経験が父親に対する魅力にどのように関係しているかを探るために、①相関分析、②重回帰分析、③主成分分析、および④共分散構造分析を行った。

1. 相関分析

父親との接触経験に関する因子得点と父親に対する魅力因子得点とのピアソン相関値を算出した。これをTable 3に示す。「情動的絆」は、過去、現在のいずれにおいても、父親に対する魅力の3側面と有意な正の相関を見せ、魅力の形成に大きな役割を果たしているといえる。「統制」も、過去、現在いずれでも、相関値は低いが正の相関が認められた。過去や現在の「統制」は「人間的魅力」と有意な関係があった。また、過去の統制経験は、「両親間の親和」との間に有意な正の相関を見せた。したがって、この分析では、仮説2はおおむね支持されたが、「統制」が魅力の源泉となることも示された。

2. 重回帰分析

魅力と接触との経験をより明確にするために、一連の重回帰分析(変数増減法、投入基準 p

Table 2 対父親魅力尺度に関する因子分析（主因子法，プロマックス回転 $k=3$ ）の結果
—プロマックス回転後の因子負荷量—

	I	II	III
[I. 人間的魅力]			
10 父親は、思いやりのある人である。	.870	-.108	.050
9 父親は、家族のことをいつも気にかけていてくれる人である。	.860	-.104	.009
11 父親は、1人の人間として尊敬できる人である。	.729	.117	.089
14 父親は、私が困った時には、一番頼れる人である。	.692	.236	-.087
6 父親の仕事に対する態度は、立派である。	.477	.166	.115
5 私は、1人の男性としての生き方や人生観の点で、父親に共感する。	.400	.257	.256
[II. 異性としての魅力]			
1 私は、父親の容姿を人に自慢したい。	-.189	.895	-.026
2 父親が背広を着た時の姿は、素敵である。	.058	.707	.053
7 父親の話し方や声は、素敵である。	.198	.621	.043
8 私は、父親が家で力仕事をする姿に勇らしさを感じる。	.252	.465	-.065
13 父親は、私の理想の男性である。	.311	.450	.121
[III. 両親間の親和]			
4 父親と母親とは、気持ちの通じ合った夫婦である。	.002	.021	.926
3 父親は、母親のことをとても愛している人である。	.149	-.044	.729
15 父親と母親は、率直に意見を言い合える夫婦である。	-.034	.010	.714
[因子間相関]			
	I	.561	.621
	II		.497
[残余項目]			
12 父親は、経済的に我が家の生活を支えてきてくれた人である。x			
N = 231; 初期固有値 ≥ 1.118 ; 初期説明率: 68.93%			
x: 平均値 > 3.5			

Table 3 対父親魅力と対父親接触経験との関係—ピアソン相関—

	統制_過去	情動的絆_過去	統制_現在	情動的絆_現在
人間的魅力	.278 $p = .001$.534 $p = .001$.281 $p = .001$.576 $p = .001$
異性としての魅力	.107	.396 $p = .001$.128 $p = .052$.470 $p = .001$
両親間の親和	.132 $p = .045$.389 $p = .001$.092	.367 $p = .001$

N = 231

$< .05$; 除去基準 $p > .10$) を行った。この結果を Table 4 に表す。

「人間的魅力」については、現在の情動的絆経験が最も強い影響を及ぼしており、過去の統制も小さいが有意な影響を示した。「異性としての魅力」は現在の情動的絆経験、「両親間の親和」は過去の情動的絆経験によって、それぞれ強く影響されていた。これらは、仮説 2 と一致している。

3. 高次主成分分析

対父親魅力 3 因子得点および対父親接触 6 因子得点を対象として主成分分析（プロマックス回転 $k=3$ ）を行った。固有値 ≥ 1.000 の基準で 2 主成分を得ることができた。これを

Table 4 父親に対する魅力におよぼす父親との接触の影響—重回帰分析（変数増減法、投入基準 $p < .05$; 除去基準 $p > .10$)—

人間的魅力	情動的絆_現在	$\beta = .541$	$p = .001$
	統制_過去	$\beta = .122$	$p = .030$
		$R^2 = .332$	$p = .001$
異性としての魅力	情動的絆_現在	$\beta = .470$	$p = .001$
			$R^2 = .221$
		$p = .001$	
両親間の親和	情動的絆_過去	$\beta = .389$	
			$R^2 = .151$
		$p = .001$	

N = 231

Table 5 に示す。第 I 主成分には、対父親 3 因子得点と過去と現在の「情動的絆」2 因子得点が大きな負荷を見せた。第 II 主成分では、過去と現在の「統制」2 因子得点の負荷量が大き

Table 5 父親に対する魅力と父親との接触に関する高次主成分分析（プロマックス回転〈 $k = 3$ 〉）の結果 —プロマックス回転後の主成分負荷量—

	I	II
人間的魅力	.858	.046
異性としての魅力	.834	-.154
両親間の親和	.825	-.174
統制_過去	-.037	.956
情動的絆_過去	.677	.277
統制_現在	-.018	.967
情動的絆_現在	.709	.262
[主成分間相関]		.282

$N = 231$
 初期固有値 ≥ 1.639
 初期説明率: 73.94%

かった。この結果は、仮説2と一致して、父親に対する魅力の形成に情動的絆が強く影響していることを示している。

4. 共分散構造分析

Amos5.0を利用して「父親との過去の接触経験→父親との現在の接触経験→父親に対する魅力」の構図に関する分析を行った。ここでは、観測変数の構造方程式（最尤推定法；豊田, 1998）の分析を試みた。まず、先の高次主成分分析と重回帰分析の結果に基づいて、変数間にパスを設定したモデルを作成した。その上でAmos5.0を実施した。なお、父親に対する魅力の3側面間の関係については、因子間の関係から（Table 2 下段参照）「異性としての魅力、両親間の親和→人間的的魅力」という関係を設定

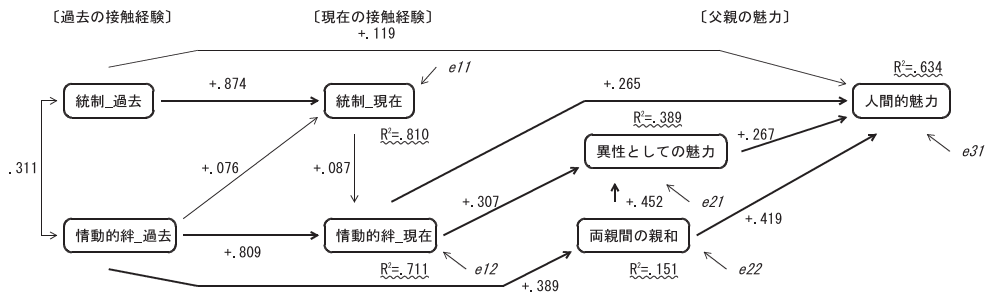
した。その上で、修正指数を参照しながら、モデル適合度を改善した。最終的に得られたモデルを Fig. 1 に表す。

IV. 考 察

本研究の主目的は、父親との接触経験が父親に対する魅力におよぼす影響を解明することにあった。そのために、小野寺（1984, 1993）が作成した尺度を改変した対父親接触経験尺度と、小野寺（1984）に基づく対父親魅力尺度を作成し、女子大学生に実施した。

因子分析の結果、父親との接触経験は、過去（「中学3年生の頃」）、現在（「この6ヶ月間」）のいずれの場合も、「統制」と「情動的絆」の2側面に明確に分離することが分かった。これは、小野寺（1993）の尺度を用いて父親と母親との現在の接触経験を測定した先行研究（諸井, 2004）の結果と一致し、仮説1を支持した。また、父親に対する魅力では、小野寺（1984）と同様に、「人間的的魅力」、「異性としての魅力」、および「両親間の親和」の3因子が抽出された。したがって、本研究で扱う接触経験や対父親魅力の側面は、一定の普遍性が確保されたと判断できる。

本研究では、父親の魅力の規定因を相関分析、重回帰分析、主成分分析、および共分散構造分析によって探った。全体としては、仮説2は支



矢印: 標準化パス係数 [有意水準: すべて $p < .105$]
 $e11 \sim e31$: 誤差変数
 [モデル適合度] $\chi^2_{(9)} = 16.339, p = .060$ $GFI = .981, AGFI = .942$

Fig. 1 父親の魅力と父親との接触経験との関連 —観測変数の構造方程式（Amos5.0, 最尤推定法）による因果分析（ $N = 231$ ）—

持されたといえよう。主成分分析では、父親の魅力が過去や現在での「情動的絆」と強く関係していることが明らかになった。しかし、相関分析や重回帰分析によると、過去や現在の「統制」も父親の魅力に影響することが見出された。

共分散構造分析により父親の魅力に対する父親との接触経験の影響の構図を探ったところ、「過去の情動的絆→現在の情動的絆→異性としての魅力、人間的魅力」という影響の流れに加え、「過去の情動的絆→両親間の親和→人間的魅力」と「過去の統制→人間的魅力」という、現在の経験よりも過去の経験の影響の存在も認められた。

前者は、父親と子どもの親密な相互作用の継続が異性としての父親の魅力や人間としての一般的魅力を高めることを意味する。後者の2つの影響の流れは、注目すべきである。「過去の情動的絆→両親間の親和→人間的魅力」の流れは、トラウマの概念 (Freud, 1917) やアダルト・チルドレンの概念 (Woititz, 1983) と一致している。つまり、現在よりも過去における父親との情動的不全関係が父親に対する否定的感情を引き起こすのである。また、「過去の統制→人間的魅力」は、Mitscherlich (1963) が精神分析的観点から指摘した現代社会における伝統的父親像の喪失と対応しているかもしれない。つまり、父親が自分に統制的影響をおよぼしたという過去経験は、父親の魅力を低減するのではなく、実は父親の一般的魅力を高めるのである。Mitscherlich の主張に立てば、過去における父親の統制機能の希薄化が父親存在を中性化させていくと解釈できよう。

ところで、本研究の被験者は、家族と同居している者 ($N = 142$) とそうでない者 ($N = 89$) から構成される。共分散構造分析の結果によれば、父親による過去の「統制」が「人間的魅力」、過去の「情動的絆」が「両親間の親和」に有意な直接的な影響をおよぼしている。家族の状況を考慮すると、次のように推測できる。家族と同居している者に比べて、別居している者は、過去に父親がおよぼした影響が顕在化す

るのかもしれない。なお、父親の接触 (過去・現在) や魅力における同居・別居差を確認したが、いずれの因子得点についても有意差はなかった ($t = .077 \sim 1.422, ns.$)。

すまいの効果を確かめるために、全体の分析で用いたモデル (Fig. 1) を対象に家族の状況別に共分散構造分析を行った。家族同居群のほうが若干モデル適合度が高いが、家族同居、家族別居群ともに十分な適合度が得られた (家族同居群: $X^2_{(9)} = 14.581, p = .103, GFI = .974, AGFI = .918$; 家族別居群: $X^2_{(9)} = 11.001, p = .276, GFI = .967, AGFI = .897$)。家族同居群では「統制_過去→人間的魅力」のパスが有意水準に達しなかった。また、家族別居群では「情動的絆_過去→統制_現在」と「統制_現在→情動的絆_現在」のパスが有意でなかった。これら以外のパスは、全体での分析と同様に、すべて有意水準を満たしていた。次に、家族同居群と家族別居群での対応する11対のパスの大きさを比較したが、有意差は認められなかった ($t = .225 \sim 1.595, ns.$)。

したがって、過去の「統制」が「人間的魅力」におよぼす直接的影響の点でいくつかの差異が見られたものの、父親との同居・別居による影響は全体としては認められないといえる。

本研究では、父親と子ども (娘) の関係に焦点をあわせ、父親と母親の関係性については扱わなかった。共分散構造分析で得られた「過去の情動的絆→両親間の親和→人間的魅力」の流れは、先述した父親との過去経験の影響だけでなく、父親と母親の関係性が父親に対する魅力を決定することを表している。

平田 (2003) は、中学生の父親を対象として、子どもとの接触行動や関わりの意識を尋ね、前者については「会話 / 表現行動因子」と「管理 / 成熟への要求行動因子」、後者については「会話 / 表現意識因子」と「管理 / 成熟への要求意識因子」を抽出した。2因子それぞれは、本研究の情動的絆と統制に対応する。平田は、これら4側面を尺度化し、4得点を対象とするクラスター分析を行った。「不言実行型」、「有

言不実行型」, 「有言実行型」, 「情緒中心型」, および「無関心型」の分類が可能であった。これら5類型と妻との連携感との関連を見ると, 「有言実行型」が最も高く, 「情緒中心型」, 「不言実行型」, 「有言不実行型」, 「無関心型」と連携感が薄れた。これらの結果は, 父親と子どもとの接触が父親と母親との関係と関連していることを示している。

また, 尾形・宮下・福田(2005)は, 幼児(2~6歳)のいる専業主婦家庭を対象に, 父親の行動と幼児の攻撃行動との関係を調べた。子どもや妻と積極的にコミュニケーションをはかる父親の下では, 幼児の攻撃行動が抑制され, さらに, 妻の側が妻としての役割や母親としての役割に対して充実感を抱いているときに, 攻撃行動は最低であった。この研究も, 父親の行動が母親の行動と相乗的に子どもに影響をもたらすと解釈できよう。

平田(2003)や尾形ら(2005)が得た結果は, 父親と母親がどのような関係を営んでいるかも子どもによる父親の魅力形成に重要であることを示唆している。父親と母親の関係性に関する子どもの認知を媒介させながら(諸井, 1997参照), 父親の魅力に関する規定因の構図を今後検討する必要があるだろう。

本研究では, 基本的に父親との接触経験を説明変数, 父親の魅力を目的変数として分析を行った。つまり, 子どもに対して父親が営む行動の規定因は問題にできなかった。子どもに対する父親の関わりは, 父親の社会的属性, 性役割観や, 夫婦関係などによって影響されるかもしれない。

たとえば, 末盛(2004)は, 全国標本調査(NFRJ 98)を利用して, 子ども(末子年齢6-18歳)に対する父親の接触行動(夕食, 外出)の規定因を探った。父親の性役割観の影響は見られず, 労働時間が長く, 管理職に就いていたり, 学歴が高いほど, 子どもとの夕食頻度が低減した。これは, 非具象的な労働形態の増加が父親存在を心理的に希薄化するというMitscherlich(1963)の指摘と一致する。

子どもに対する父親の関わりが父親の魅力の源泉となることは, 本研究ではおおむね支持された。しかしながら, 先述したように本研究に関するいくつかの問題も浮き彫りにされた。これらの問題を踏まえながら, 今後も父親の魅力の規定因に関する構図を検討する必要があるだろう。

<付記>

(1) 本研究は, 池田晃子・奥村真己子・高木直子・山崎絵美さん(同志社女子大学・現代社会学部・社会システム学科2003年度卒業生)が筆者の下で取り組んだ卒業研究に由来する。卒業研究で彼女たちが示した熱意がここでの成果を生み出した。

(2) 本研究の分析は, 前研究(諸井, 2005)と同様に, 同志社女子大学・学術研究推進センター2004年度研究助成金(「現代青年における親子関係認知の基本的構造」)に基づいて行われた。

(3) データの統計的解析にあたって, SPSS13.0J for Windows および Amos5.0 を利用した。

(4) 本研究は, 第8回対人社会心理学フォーラム(大阪大学人間科学部, 2005年11月18日)で発表した。その際, 出席者の方々から様々な貴重なご示唆・ご意見を賜った。

(5) E-Mail: kmoroi@dwc.doshisha.ac.jp

V. 引用文献

- Bowlby, J. 1969 *Attachment and loss, vol. 1: Attachment*. London: Hogarth. 黒田実郎・大羽泰・岡田洋子訳 『母子関係の理論 I — 愛着行動 —』1976 岩崎学術出版社
- Freud, S. 1917 *Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse*. 懸田克躬訳 『精神分析学入門II』2001 中公クラシックス
- 平田裕美 2003 青年期前期の子どもに対する父親の関わり — 分類と特性 — 家族心理学研究, 17, 35-54.
- 今井芳昭 1986 親子関係における社会的勢力の基盤 社会心理学研究, 1, 35-41.
- 柏木恵子(編) 1993 『父親の発達心理学 — 父性の現在とその周辺 —』川島書店
- 久世敏雄・平石賢二 1992 青年期の親子関係研究の展望 名古屋大学教育学部紀要(教育心理

- 学科), 39, 77-88.
- Mitscherlich, A. 1963 *Aufdem Weg zur vaterlosen Gesellschaft. Ideen zur Sozialpsychologie*. R. Piper & Co. Verlag. 小見山実(訳)『父親なき社会 — 社会心理学的思考 —』1972 新泉社
- 諸井克英 1997 子どもの眼からみた家庭内労働の分担の衡平性 — 女子青年の場合 — 家族心理学研究, 11, 69-81.
- 諸井克英 2002 彷徨する親子関係 和田実・諸井克英著『青年心理学への誘い — 漂流する若者たち —』ナカニシヤ出版 45-66頁
- 諸井克英 2004 若者の対人環境管理に関する社会心理学的研究(6) — 親との関係経験が恋愛観におよぼす影響 — 同志社女子大学学術研究年報, 55, 129-143.
- 諸井克英 2005 女子青年における父親と母親からの影響認知 同志社女子大学学術研究年報, 56, 89-96.
- 尾形和男・宮下一博・福田佳織 2005 父親の協力的関わりと家族成員の適応 — 母親役割・妻役割達成感, 子どもの攻撃性, 父親のストレス・コーピングとの関係 — 家族心理学研究, 19, 31-45.
- 小野寺敦子 1984 娘からみた父親の魅力 心理学研究, 55, 289-295.
- 小野寺敦子 1993 日米青年の親子関係と独立意識に関する比較研究 心理学研究, 64, 147-152.
- Parsons, T., & Bales, R. (Eds.) 1956 *Family: Socialization and interaction process*. Routledge and Kegan Paul. 橋爪貞雄他(共訳)『核家族と子どもの社会化』1970 黎明書房
- 篠崎正美 1996 日本家族の現代的变化と家族変動の諸理論 — 日本的「近代家族」のゆくえ — 野々山久也・袖井孝子・篠崎正美(編)『いま家族に何が起きているのか — 家族社会学のパラダイム転換をめぐって —』323-357頁
- 末盛 慶 2004 父親と子どもの接触頻度の規定要因 渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子(編)『現代家族の構造と変容 — 全国家族調査[NFRJ 98]による計量分析 —』東京大学出版会 231-243頁
- 豊田秀樹 1998 『共分散構造分析入門 [入門編] — 構造方程式モデリング —』朝倉書店
- Woititz J. G. 1983 *Adult children of alcoholics: Expanded edition*. Health Communication, Inc. 斎藤 学(監訳)『アダルト・チルドレン — アルコール問題家族で育った子供たち —』1997 金剛出版